

金賞 小学生の部

かっこいい二ねんせいになりたいな

浜松市立北浜南小学校 一年

鈴木 咲久

ぼくのいえは、がっこうからとてもおいです。ともだちとかえりたくても、こえをかけることができなくて、ひとりでかえるひもありました。がっこうといえのはんぶんのところまで、おかあさんがまっていてくれたけど、そこにいくまでがぼくにはとてもとおくかんじて、ないてしまったひもありました。

あめのふったかえりみち、ぼくはそのひもひとりでした。そのひはくらすのともだちとけんかをしてしまい、かなしいきもちのまましたをむいてあるいていました。すると、とつぜんうしろから、

「いっしょにかえろうよ。」

と、しらないおとこのこがいました。おなじくらすのこで

も、となりのくらすのこでもない、みたことのないおとこのこでした。そのこはぼくにこういいました。

「どうしてひとりなの？」

ぼくはともだちとけんかをしてしまったことをはなしました。

「けんかしてもみんなともだちだよ。それにぼくたちももうともだちだよ。またいっしょにかえろうよ。」

そうはなしているうちにおかあさんがまっているところにつきました。

つぎのひ、がっこうできのういっしょにかえったおとこのこにあいました。二ねんせいでした。いまもがっこうであうと、いつもてをふってくれるし、なまえをよんでくれます。ぼくもそんなかっこいい二ねんせいになりたいです。



動くことの大切さ

静岡市立清水入江小学校 四年

高田 たかだ 美桜 みお

「カラスが、ゴミをちらかしている！」

ゴミ収集ではない日に、収集所にゴミを捨てて行く人がいた。それをカラスが食いちらかしゴミがふくろから出てしまいい、近所の人はこまっていた。しかし、多くの人は「こまったねえ。」と言うだけで、特に何もできずにいた。私もまた、「ルールを守らないなんて、ひどい人だな。」と思う事しかできなかった。

そんな中で私は登校する時、お向かえのおばちゃんがホウキとチリトリを持って、一人でちらかったゴミを片付けてくれているところを見かけた。そのおばちゃんはずっと「いつてらっしゃい。」と元気に声をかけてくれる。

「今日は、ゴミ収集日ではありません！」

ある週末には、こんな貼り紙がポールにつるされて、収集所におかれていた。その前の駐車場では、おじちゃんが車の中からゴミを捨てて行く人がいないか、ずっと見張ってくれて

いた。二人のおかげで、収集日ではない日にゴミを捨てて行く人はへり、カラスの悪事も目立たなくなった。

「動くことの大切さ」

私は今回、その事を思い知った。収集日ではない日に捨てられたゴミをカラスがあらしている事に、私も他の多くの人も「気付いて」いた。しかし、その気付きの後に動く事ができず、ただモヤモヤした気持ちでいるだけだった。そのモヤモヤをだれかが解決してくれると、ただ待っていただけなのかもしれない。そんな時におじちゃんとおばちゃんの姿を見て、私はさがしていた答えが見つかった気がした。

「こまった」「どうしよう」に気付くだけでは、解決できないし親切にもつながらない。「あの子、重そうな荷物を運んでいるな」と気付いたら、半分持ってあげよう。「最近あの子、元氣ないな。」と気付いたら、「大丈夫？」と声をかけてあげよう。もし私が、友達にそうしてもらえたら、私だったらうれしいから。そしてやさしくされた人は、きつと次は他のだけかにやさしくなれるだろう。そういう姿を見た人もまた「次は私も！」と想ってくれるかもしれない。そうしたら、私の周りはずっと、親切でいっぱいになる。

一つ一つは小さな親切でも、たくさん集まれば大きなやさしさになるはず。最初に動くのはちょっとはさくして、と



金賞

でもむずかしい。でもだれかが動けば、それにつづいてくれる人がいると、おじちゃんとおばちゃんが教えてくれた。気付いた後に動くのはやっぱりはづかしいしむずかしいけれど、いつか私も大きなやさしさの一人目になれたらいいな。



やっと言えた言葉

浜松市立可美小学校 四年

なかむら
中村 ほの葉

私は最近やっと言えた言葉があります。それは、「おはようございます。」という言葉です。

私はこのようなあいさつができない時があります。相手に、どんなふうに言えば良いのか分からないし、きんちようするからです。そんなこんなをしている間に、タイミングをみうずなあってしまいます。それで私は、どうやってきんちようせずにあいさつができるか、いくつか考えてみました。まず最初に、目を見ないであいさつを試みることにしました。あいさつはできましたが、でも何か足りない気がしたので、しつぱいでした。次に、あまり深くおじぎをしない方法を思いつきました。ですが、どうしても何か足りないと思ってしまうました。そのまた次に、友達とあいさつをしてみました。友達といっしょの方が、あいさつがきんちようせずにできるからです。ですが、友達といっしょにやると自分の声が小さくなってしまうので、ちゃんとしたあいさつはできませんでし

た。最後に、あいさつをしない方法がありました。どんな方法をためていくうちに、私の中のモヤモヤもふえていきました。どうしてそうなるのか、じっくり考えても答えはでませんでした。私は友達がしているあいさつを、思い返してみました。私は、はっとしました。

「そうだった。私は私のあいさつをされた人の気持ちを一つも考えていなかったんだ。」私は次の日、さっそくあいさつを試してみました。なぜだか、すぐに言葉ができました。すると、みんなが笑顔であいさつを返してくれました。私はうれしくなって、何回もしました。私は私のあいさつをされた人の気持ちを、大切にしていなかったのです。なので、私は相手の気持ちを考えて笑顔で、気持ち良くあいさつをしました。笑顔であいさつをした方も、された方も、とってもうれしくなります。あいさつは、まほうの言葉です。私は登校中、会った人全員とあいさつをしました。その日は、じゅ業で手もあげられたし、みんなと仲良くすごすことができました。もうそのころには、私の中のモヤモヤはなくなっていました。私は、すっかりした気持ちで家に帰りました。

私は、あいさつも親切の一員だと思えます。だれでもできるし、あいさつした方もされた方も、心が温かくなるからです。私はこれからずっとずっとあいさつをつづけていきます。

毎朝、こう言うのです。

「おはよう。」



金賞 中学生の部

小さな親切から

静岡市立城内中学校 三年

田原 巧舵たはら こうた

僕は小さな親切を隠れた本当の優しさだと考える。誰にも気づかれなかったとしても誰かの為に行動できる人は心から尊敬できる。また、あえて善い行いを他人に気づかれないようにする人もいる。相手に気を遣わせないように。そんな気遣いを自然とできるような人に僕は会えた。

今年、僕は自転車を頻繁に使うようになった。外出するときはもちろん、部活を引退した僕にとっていい運動になるので、ほぼ毎日使っている。そのせいか僕が友達と遊んだ後帰宅途中で自転車のチェーンが外れてしまったのだ。僕は友達に協力してもらい、なんとか近くコンビニの駐輪場まで自転車を運んだ。しかし、自転車が故障したのは初めての経験で、僕はどうすべきかわからなかった。友達は直してくれようとしたが、僕

の自転車のチェーンは友達の自転車のものより細く、さらに変に絡んでいたので直せなかった。その後も色々な方法を試したが、失敗した。家までかなり距離はあるが、僕は仕方なく自転車を担いで歩くことを決意した。そんなとき駐車場にトラックを停めている男性が買ったばかりのアイスをくわえながら、「自転車が壊れたのか、ちょっと待って」と僕達を呼び止めた。驚いたが男性がトラックから降りているのを待っているとすぐに降りてきてくれた。男性は最初に僕達がチェーンを触ったときに油で手が汚れないようにときれいな手袋をくれた。その後、僕の自転車のチェーンを確認して、アイスの棒を上手く使いながらチェーンを固定し、僕達に的確な指示をくれた。なんとか三人で協力して自転車を元に戻すことができた。あまりにも短時間で直せたため、とても驚いた。感謝の気持ちでいっぱいだ。僕はそんなことを精一杯伝えた後自転車を使った家に帰った。友達と男性が修理に協力してくれたことも新品の軍手を貸してくれたこともすべてのが紛れもない親切だった。そのように思い返していると、僕はすぐそばに隠れていた優しさ気づいた。男性は僕達を長く待たせないようにアイスを早く食べてくれていた。しかも普通を装って。一緒にいた時間についてもそうだ。僕達と別れた後はすぐにトラックを走らせていた。作業着と思われる服からも仕事の合間の休憩中に僕を助

けてくれたのだとわかる。限りある休憩時間なのでゆっくりとしたかったと思う。それでもギリギリまで優しく僕達に接してくれた。僕は申し訳なさを感じつつ心は温かかった。僕もどんなときでも自然と気遣いができる人になりたい。小さな親切は誰かにとつてとても大きなものになっているのだとわかったからだ。

小さな親切は気づきにくいが見つけていくことができた僕達の生活はもっと豊かになる気がする。



親切は縁の下の力持ち

静岡県立浜松西高等学校 中等部 一年

花岡 咲弥
はなおか さや

仲の良い友達と一緒に下校している時の事です。その日も話をしながら帰っていました。横断歩道に差し掛かった時、車に乗っていた方が私達に気が付き横断歩道の前で止まってくれました。私達は軽く会釈をして、小走りで横断歩道を渡りました。話の続きをしようと思いい私が友達の方を振り向いた時、驚いたことに、友達は止まってくれた車の方に体を向けて、お辞儀をしていました。私もあわてて一緒にお辞儀をしました。動きがぎこちなくなっていました。わざわざ立ち止まって、走り去っていく車にお礼をしている人を私は初めて見ました。その時は「わざわざ」と思ったし、相手には見えていないのではなにかと思いました。

また、別の日にその友達と一緒に下校した時の事です。私達は、バスと電車乗り継いで登下校をしています。その日の電車は、一般の席には空席がなく、優先席だけが空いていました。

私達は部活の帰りで、バスでも座れなかったのも疲れていました。私は一駅で着きますが、その友達は何駅か乗らないといけないので、「優先席に座らないの」と聞きました。そうしたら、「私は元気だし、優先席には座らないって決めてるの。空いてる方が座りやすいと思うし」となんでもないように友達は返事をしました。私は、なんてかっこいいのだろうと思いましたが。そしてそんなことを聞いてしまった自分を恥ずかしく思いました。私は今まで、自分が疲れてしまったら優先席でも座っていたし、もしも妊婦さんや体の不自由な方がいたら席を譲ればよい、と思っていました。けれども友達は後から乗る人の座りやすさまで考えて行動していたのです。その時私は、親切や思いやりは意外と見えていないところで行われていることに気が付きました。また、友達が人から受けた小さな親切を当たり前だと思わないで感謝できる心の豊かさは、見えない他者に対して温かい心遣いができる優しさにつながっているのだなと思いました。

私は、それから横断歩道を渡った後に一緒にお辞儀をするようになりました。また、電車では一緒に立つようになりました。ある日、電車の中で一つだけ一般の席が空いていました。私は、その友達に席を譲りました。私に大切なことを気付かせてくれた友達に小さな親切を返したくなったからです。親切をし

ている人には親切をしたくなる、という新しい発見もありました。その時、今までの彼女の親切を思い出して、急に今の私の気持ちを伝えたくまりました。だから「小さくて、大きい親切をいつもありがとう」と、突然言いました。そして、友達は少し驚いた顔をした後に笑顔で「どういたしまして」と返してくれました。その日の疲れが吹き飛ばような、とびつきり素敵な笑顔でした。



おかえりの贈り物

静岡県立浜松西高等学校 中等部 一年

山本 名織
やまもと なおり

ある日の学校からの帰り道のことだった。住宅街を歩いていると植物に水をやっていた男性が、「おかえり」とにこやかに声をかけてくれた。私はその人の顔を知らなかったし、話したことともなかった。しかし、その言葉を聞いた途端、一日の疲れが癒され、もう少し頑張ろうと元気をもらえた気がした。と同時に一つの疑問を抱いた。

なぜ初対面の人が、私に「おかえり」と言ってくれたのか。帰る途中の人を見つけたからか、なんとなく挨拶をしたかったからか。私は歩きながら考えた。

私は挨拶を、あくまで人とのコミュニケーションの一部としか思っていなかった。けれど、あの時の「おかえり」にはそれ以上の意味があるように感じた。相手の存在を認めていることを強調したり、相手を明るい気持ちにさせたりする力が挨拶にはあるのだと気が付いた。

小学生の頃、集会で先生が「恩送り」について話してください

たことがある。誰かから受けた恩を、その人にお返しするだけでなく、自分も別の人に親切にするという考え方だ。みんなが親切な行動をしていくことで、善意が連鎖され、親切の輪が広がっていく。

「おかえり」、その声をかけてもらったことは、私にとって立派な親切だった。挨拶なら何か特別なものではなくても、誰にだって渡すことができる。私だってすれ違った人に、「おはようございませう」「こんにちは」と元気な声をかけることはできるはずだ。それを聞いてまた別の誰かに声をかけてくれる人が出てくる、という小さな連鎖が恩送りの大きな発達に繋がっていく。

あの日の「おかえり」は、私に挨拶が小さな親切であると共に、大きな親切の輪をつくるために私たちが簡単にできることだと教えてくれた。たった一言でも挨拶をするだけで、人の気持ちは変わり、心も温かくなる。そして、それは特別なお金や時間がなくてもできる、一番身近な恩送りの形なのではないか。

これからは、私もできる限り挨拶をしようと思う。顔を知っている人にはもちろん、知らない人にも勇気を出して声をかけたい。小さな親切が積み重なっていけば、この街は今よりもっと温かい場所になるはずだ。そして、この街の誰かが他の街に広げてと繰り返されていくうちに、大きなスケールで挨拶という親切の和が広がっていくと思う。あの日の「おかえり」のよ



金賞

うに、私も誰かの心を少しでも温められるような人になりたい。
そして、世界が今より少しでも親切で繋がり、明るくなること
を願うと共に努力していきたい。



銀賞 小学生の部

見えない親切の山

浜松市立白脇小学校 六年

おおたに
大谷 紗葵

私は五年生の時のたんじんの先生に「人に親切にできる人になつてほしい」と言われました。先生はクラスみんなに言っていると分かっていたのに私はなぜか「自分」に言われている気がして、少しむねにはりのようなものがささった感覚になりました。なぜなら、私は自分でも思う「親切なヤツ」だと思いません。でも、その「親切なヤツ」は出てきてくれない時があります。それは近くの席の子が物を落とした時です。物が落ちた三秒間、いや十秒間こんなことを考えてしまうんです。(落ちた。拾う? いやでもすぐ拾うよね。でも学校のお手本としてはここでスツと拾ってあげないと。どうしよう。拾おうかな。)そうこう考えているうちに席のまわりの子が自分で拾っていて、ホツとした気もちの中に少し申しわけない気もちがありま

した。そのような出来事を何回もくり返していたのでむねがい
たくなりました。

夏休みが過ぎて二学期になったころ、クラスの一人の女の子
が人に親切にしたということが電話で伝えられたという話がク
ラスにひびきました。クラスにひびいたんじゃないやなくて私の心に
ひびきました。だって私も私より小さい学年の子にやさしく
せつしてるし、落とし物も「親切なヤツ」が出てきてくれる時
はちゃんと拾ってるのにあの子はたった一人の人に親切にした
だけでみんなにちゅう目されて。

その子は近いうちに表しようされてすごく悲しかったです。
他にはおこっている気もちやうらやましい気もち、中にはもっ
ともっと親切にしてたなら私もいつかこんなふうに表示しようさ
れているのかなとかそんな言葉で頭がいっぱいになってるのも
いやでしかたなくて、六年生になった私は今だっただらすごく分
かって、その時の私は、五年生の時の気もちの名前はくやしい
という名前の気もちだったことです。他にもいろいろ分かった
ことがあって、やっぱり、くやしいって思ったけどみんなは私
の全てを知っているわけじゃないから「はんせい」っていう気
もちの名前も分かりました。

でも、こんなことでくじけるんじゃないやなくてその親切をこの先
も、中学になっても続けることが表しようされることよりも

かっこいいし、その小さな親切をつみあげていって親切の山を
みんなの見えない所でつくっていくことが私の中で一番なっと
くいったせんたくだし、この恩返しが起こっても起こらなくて
も五年生の時の先生が言ってくれたことを心がけて中学、高校
でも必ず続けて絶対大人になったらかっこよくてやさしい人に
なりたいです。



小さな一歩、大きな成長

浜松市立雄踏小学校 五年

たの
ひまり
田野 向日葵

ある日、家族で出かけた時のこと。信号で車が止まった時に、前に乗っていた父と母が何か焦ったように話をしていた。と思ったら、もう信号が変わるのに父が車からおりて行ってしまった。母は父がおりたのに信号が青に変わったからそのまま進んで、少し進んだ脇道で止まった。私は何が何だか分からない状態で車に乗っていた。車を止めると母は父に車の場所を教えにいくよう妹に頼んだ。

しばらくして戻ってきた父はニコニコしていた。何があったのか聞いてみると、信号待ちをしていた時に目の前の横断歩道を急いで渡っていたおじさんが何かを落としていったらしい。おじさんは気づかず走っていき、何を落としたのか分からないので、もし財布や大切なものだったらいけないと父が追いかけて知らせてあげたらしい。

「気がついちゃったら無視はできないよね。」
と笑う父はうれしそうだった。

別の日には、食事に行ったお店の待合スペースでみんな待っていた時に、突然母が立ち上がって行ってしまった。不思議に思っていたら、すぐに戻ってきた。椅子に落ちていたカギをついさっきまでそこに座っていたお姉さんに渡しに行っていたらしい。

「だってカギなくしたら車も乗れないし家も入れないし大変でしょ？」

と母も父の時のようにうれしそうだった。

私はお店に自分で注文したり、店員さんに声をかけるのが苦手。そんな私が知らない人に声をかけたり、落とし物を届けたりできるのか。はずかしくてできない気がする。だから母に聞いてみた。

「お母さんはいつから人に声をかけたりするのがはずかしくなくなかった？」

そしたら母は、
「いまでもはずかしいし、どうしようって思うことの方が多いよ」

と言ってきた。はずかしくてどうしようって思うのにどうして？と思っていたら、

「はずかしいけど、あとでなくて困る気持ちとか、なくした！落とした！と思っていた物が見つかった時のうれしい気持ちは

知っているから、相手がよかったってホッとしてくれるなら、
はずかしいはすてられるかな」

そう言っていた。私もなくした物が見つかってうれしい気持ち
ちは知っている。今年の納涼祭で財布をなくしたばかりだっ
たから。

すごい人だったしあきらめていたら、中身もなくならず
けられていた。すごくうれしかったしホッとした。誰かわから
ないけど、その人も父や母と同じ気持ちでいてくれたのかな？
と思えてくる。

大事なしゅん間に声をかけられなかったことを後悔しないで
すむように、そして次の人にむりやりではなく、親切の輪を自
然に広げてやさしい世界をつなげていきたいと思う。



親切のお返し

浜松市立雄踏小学校 六年

やまへ
山部 美海

日に日に暑さが増す七月の下旬。夏休みが始まってすぐのこ
と。私は家族と共に空港にいた。私は毎年夏休みになると祖父
母の家に行くのだ。

祖父母が住んでいるのは鹿児島県。私の住んでいる静岡から
鹿児島まではとても遠い。だから飛行機に乗って行く。私は今
回どこの飛行機に乗るのだろうと、チケットを見た。そこには
「ソラシドエア」と書かれている。そのとき、一つのことを思
い出した。

私が小学三年生のときの話。一、二年生の時はコロナが流行
していて、長らく鹿児島に行けなかった。それも、私はと
てもワクワクしていた。保安検査を通過し、いざ、飛行機に乗
るぞというとき、CAさんに声をかけられた。

「これ、どうぞ。」

手元を見てみると折り紙セットだった。当時折り紙にハマって
いたこともあり、私は喜んで受け取った。

席についてから、私は一つアイデアを思いついた。早速折り紙を開け、あるものを折り始めた。私が折ったのは四つ葉のクローバー。四つ葉のクローバーを見つけると幸運が訪れるという言い伝えがある。それに、今でも折り方を覚えているほど思いついた形だった。CAさんが通ったとき、私は声をかけ、今折ったばかりの四つ葉のクローバーをわたした。きれいと言えるものではなかったと思うが、CAさんは、

「これくれるの？すごく可愛い！ありがとう。」

と言ったとても喜んでくれた。私は心がじんわり温かくなるのを感じた。と、同時に、

「ちょっとまってね。」

と言って、CAさんは自分の座席に向かった。私は椅子から少し身を乗り出してCAさんの方を見ていた。しばらくして先ほどのCAさんが戻ってきた。

「お返しにどうぞ。」

と言って折り紙で折った恐竜と、ソラシドエアのポストカードをくれた。恐竜には顔が描いてあり、ポストカードにも、「ありがとう！また乗ってね！」というメッセージが書いてあった。私はうれしいという感情が込み上げてくるのを感じた。

この出来事で、私は人がくれた親切をきちんと返そうと思うようになった。親切は相手の好意であり、とても大切なもの。

返すことで、自分も相手もうれしい気持ちになる。そう考えるようになった。いつかまた、あの時のCAさんに会ったら、恐竜の分の親切を返したい。



銀賞 中学生の部

勇気の道

静岡市立清水飯田中学校 二年

いしはら
石原 侑依

私が学校から家までの帰り道を歩いていた時のことです。私が歩いていた道は狭くて暗く、砂利がたくさんあるようなところでした。この日は小学生が家に帰って遊びに出かける時間帯でした。

その時後ろから小学生の女の子が自転車で近づいてきていました。私は邪魔にならないように道の端に避けたのですが、道が狭くて通れるか通れないかのギリギリでした。通り過ぎたなと思っていったや否や自転車で乗っていた女の子が大きな音を立てて転んでしまったのです。予想外な出来事が起きてびっくりしていたら女の子が自転車を起こそうとしていたのです。

私は助けなくては、と思い女の子に声をかけようと思いました。でも私の心の中には声をかけてもいいのかなと不安に思ってい

る自分がいました。私が女の子だったら人の前で転んだと、少し恥ずかしい気持ちになってしまふからです。そんなときに声をかけてもいいのだろうかと思っていました。でもその悩みは女の子が大変そうに自転車を起こしているところを見れば吹き飛んでしまいました。私にも非はありません。女の子はきっと小学生でも低学年くらいの子に見えました。私がしっかり止まって避けていれば……そう思うと声をかけていました。「大丈夫？」と女の子に声をかけると「うん」と涙が溜まった目で私を見て言いました。なんでもっと早く声をかけなかったのだろうと後悔しました。道に落ちた女の子のバッグと水筒を拾って自転車のかごに入れていたとき「お姉ちゃん」と女の子が声をかけてきたのです。

「どうしたの？」と尋ねると、さっきと全く違うにこにこした顔で「お姉ちゃん、すっごく優しくてかっこいいね」と言ったのです。私はその時嬉しさと胸がいっぱいになりました。「私も困っている人がいたら助けてあげられる人になりたい！」と勇気と正義感を秘めた大きな瞳で言ってくれたのです。私は私のしたことで、こんなにも頑張ろうと思ってくれる人がいることを女の子に気付かせてもらいました。「ありがとう」といって去っていく女の子の背中を見たら、気持ちがスッキリしていました。

私は今日もこの道を通ります。今まではこの狭いし、暗い、砂利がたくさんある危険な道は好きではありませんでした。きつとこれからも好きではありません。だけど私に勇気と正義を持たせてくれた大切な道です。誰かに自慢しなくてもいい。知ってくれなくてもいい。私とあの女の子だけが知っていればいいのです。

私はきつと忘れません。女の子の勇気と正義を秘めた大きな目を。また人をあのような気持ちにさせられるように。今日も思いやりの心を忘れずに過ごしていきたいです。



小さな優しき

静岡市立清水飯田中学校 二年

西ヶ谷 莉園

その日は、朝から雨が降っていた。私はいつものように駅へ向かうバスに乗ったが、車内は傘を持つ人でいっぱいだった。私はつり革に掴まりながら、少しうつむいてぼんやりと窓の外を見ていた。

「次、清水駅前〜。」

バスが止まり、数人の人が降りていった。すると、入口の段差のところで、小さな男の子がバランスをくずし、思わずしゃがみこんでしまった。お母さんらしき人があわてて

「大丈夫!」と声をかけるが、男の子は泣きそうな顔で足をおさえていた。

「足、ひねっちゃったのかな……。」

私はつい、小さくつぶやいた。そして気がつけば、足を踏み出していた。

「すみません、座らせてあげてもいいですか?」

私は、近くに座っていた年配の男性に声をかけた。その人

はすぐに「もちろん」と席を譲ってくれ、男の子をそこに座らせることができた。お母さんは「ありがとうございます」と、深く頭をさげた。

その瞬間、男の子と目が合った。まだ不安そうな顔だったが、小さな声で「ありがとうございます」と言ってくれた。私は思わず笑顔になった。

私は次のバス停で降りた。雨は少し弱くなっていた。図書館までの道を歩きながら、私は心の中でさっきの男の子の「ありがとう」を思い返していた。それはとても小さな親切だったかもしれない。

図書館につくと、友達が話しかけてきた。

「莉園、今日なんかいいことあったでしょ？顔が優しいよ。」
そう言われて、私はちょっと照れくさくなった。

「ちょっとだけね、小さなことだけど、人に優しくできた気がする。」

友達は「へえ、すごいじゃん！私も今日、誰かに優しくしてみようかな。」と言って笑った。その笑顔を見て、私はふと思った。

親切って、伝染するものかもしれない。誰かの小さな優しさが、まわりの人の心も温かくして、またその人が別の人に優しくする。そんな風に、どんどん広がっていくのだとしたら、世界はもっと温かくなる。

ら、世界はもっと温かくなる。

帰り道、空はすっきり晴れていた。私は空を見上げながら、心の中でこう呟いた。

「明日もまた、小さな親切をしてみよう。」

大きなことじゃなくていい。ただ困っている誰かに、ちょっと声をかける。重そうな荷物を持ってあげる。笑顔で「ありがとう」と言う。それだけで、きっと誰かの心に明かりが灯る。私はそう信じて、今日も、あの「ありがとう」の声を胸に、ゆっくりと歩き出す。

親切は勇気の裏返し

静岡市立清水第七中学校 三年

はやし
林 潤空

「あの、お姉さん、イヤホンケース落とししましたよ。」

つい最近、小学生くらいの小さな女の子に言われた言葉だ。とても感謝したし、とてもうれしかった。しかし、自分がい

ざ同じ立場になった時に、この女の子と同じことができるだろうか。「親切」について深く考えるきっかけになった。

お母さんの手伝いをする、廊下に落ちていたゴミを拾って捨てる、トイレのスリッパをきれいに並べる。これらの行為は身近な人や他の人がいないところでやることだから、できるのは当たり前だ。しかし、知らない人に対してやることは話が違う。私は人見知りだから、知らない人に話しかけるだけでも勇気がいる。そう、親切とは勇気がいることなのだ。

私は以前、満員のバスに乗っているときに降りられなくなりそうだったことがある。周りの人の迷惑になってしまおうと思い、勇気を出して声を上げることができなかった。そんな時、近くにいたお姉さんが私に気づいてくれて声を掛けてくれた。そして、近くにいる人に声を掛けて停車ブザーを押してもらった。その後、私がバスから降りやすいようにいろいろな人に声を掛けて道を作ってくれた。お姉さんにとっては当たり前のことだったかもしれないが、私にとってはとてもありがたいことであった。同時にお姉さんの勇気に感動した。周りの人を巻き込んで自分を助けてくれた。自分が大人になった時に同じことができるだろうか。少なくとも、今の私にはできない。でも、この経験をきっかけに、自分も誰かの助けになりたいと思うようになった。

世の中、小さな親切で人と人との関係性は成り立っているように見えるけども、その親切には勇気がある。しかし、その勇気が誰かの一日を明るくしたり、元気にしたりする力を持つている。その勇気がみんなに広がれば、みんなの一日はとても明るいものになり、世界全体を元気にすると思う。

昔は地域の人々との交流がもっと活発であったと聞く。しかし今はその交流もだいぶなくなってしまった。親切で成り立つ人とのつながりがなくなってしまったのだろうか。親切を受ける人が、その親切を受け入れなくなっているように見える。勇気を出して申し出てくれたであろう親切を拒絶してしまつては、「また断られたらどうしよう。」と思うようになるのは当たり前だ。受け手も、大きな心で他人の親切を受け入れることが必要だと思う。誰かの勇気に対して雑な対応をしてはいけない。私は勇気をもって声を掛けていきたいし、誰かの勇気をしっかりと受け入れたい。この輪が広がれば、みんながもっと笑顔で毎日を過ごせることを信じて。